

論文審査の要旨及び学力の成績

清末の小説家・吳趸人の作品は、従来低俗文学、反動保守文学との評価を受け、中華民国、中華人民共和国の時代を通してほとんど黙殺されてきた。松田氏の論文はその再評価を試みた研究である。吳趸人に関する研究が中国においても積年の過小評価ゆえに著しく立ち後れている現状において、松田氏は中華民国時代初頭の胡適、魯迅らによる批評に始まり開放政策後のごく最近の研究に至るまでの内外の主だった文献を参照しつつ、現存する吳趸人の主要な小説全作品（一部未完作品を除く）を網羅した分析を行い、吳趸人文学の特性を明らかにしている。これだけでも比類のない貴重な総括的・俯瞰的研究になっていると考えられる。

一連の作品の分析を通して松田氏が明らかにしたことは、吳趸人は「社会小説」や「写情小説」という、その時代にあっては相当に近代的な小説ジャンルを創始し、それらの作品を通して社会の啓蒙と改革を目指した先駆的な作家であり、後年彼に向けられた低俗、反動という非難は必ずしも正鵠を得ていないということである。松田氏は吳趸人の小説が同時代の様々な社会問題をくり返し取り上げている点に注目し、とりわけ社会悪と女性問題に対する作家の視点・関心が当時にあっては極めて進歩的であったことを指摘している。なかでも女性の自由恋愛、あるいは女性が恋愛を意識すること自体が、女性の自我の発見やさらには自立に向かう端緒となる可能性を吳趸人の小説が示しているという分析は、他の多くの論者が吳趸人の恋愛小説を矮小化するのとは対照的に、論考中とりわけ注目に値する。女性の恋情の意識が、当時の小説には珍しい女性の一人称（内的告白）で語られる形式的特徴との一致もあり、この主張には十分な説得力がある。総じて松田氏の論考は、政治的イデオロギーによって歪曲された吳趸人評価を個々の作品研究・解釈を通して是正し、その作品の意義を再評価し、吳趸人が清末を代表する作家であることを明らかにする目的を掲げており、いくつかの点では確実な成功を収めている。個々の作品分析、論証の進め方の中には十分な説得力を獲得できていない点も散見されるが、これらの欠点を評価対象に加えてもなお、松田氏の論文が有意義であり、今後の清末文学研究にとって重要な貢献となることは確実である。

以上のように本論文は、若干の瑕瑾を有するとしても、他に比肩しがたい内容を示すものであり、博士（人間文化学）の学位を授与するに相応しいものと認める。

附記

松田郁子氏の学位請求論文『清末の“小悪党”とフェミニズム—吳趸人の小説の意義』の審査に先立ち、松田氏の長年の研究業績、研究対象である吳趸人関連の第一次資料（中国語文献）の読解、中国語及び日本語による先行研究の広範な渉獵から判断して、松田氏の学力が博士の学位に相応しい水準であることは明らかであり、個別な学力審査は特に必要としないことが審査委員会の総意として確認された。